

■ 論 文 ■

日本語版「専門家による心理的援助を求める態度尺度 (ATSPPH-S)」の信頼性・妥当性の検討

植松 晃子* 橋本 和幸** 小室 安宏***

抄 録

本研究では、大学の学生相談室活動をどのように広げていくべきかを検討するために、アメリカの大学生を対象に作成された「専門家による心理的援助を求める態度尺度 (Attitude toward seeking professional psychological help: ATSPPH-S) (Fisher & Farina, 1995)」の翻訳版について、信頼性・妥当性を検討した。調査対象者は日本の大学生 699 名である。はじめに尺度の構造的な妥当性を検討し、翻訳版は 2 因子構造であることが明らかになったが、先行研究とは異なり両因子には負の相関が見られた。因子構造における解釈上の妥当性を検討し、それぞれ「専門的援助の求め」と「自己解決志向」と名付けた。さらに、精神的健康、心理的援助への偏見、学生相談室への関心との相関から構成概念妥当性を検討したところ、一定の妥当性が確認できた。

Keywords : 学生相談室, 援助要請態度, ATSPPH-S 尺度, 心理的援助への偏見

I. 問題と目的

近年の大学の学生相談活動では、来室した学生に対する心理相談援助を目指すだけでなく、アウトリーチのアプローチを含む活動が必要であるとされる。自ら相談室に援助を求めて来談する学生は、既に自分が抱えた問題への対処能力を有しているといえるが、問題を抱えながら、何らかの

理由で援助を求められない学生は少なからず潜在している。彼らのリスクを減じることがこのアプローチの目的の一つになるだろう。しかし学生相談員として大学生に接すると、「メンタルの問題があると思われると嫌だった」、「相談室に行ったら負けだと思っていた」という言葉を聞くことがある。こうした言葉からは、彼らにとって悩みを誰かに話すことや相談室への来談が、自尊心を

* Uematsu, Akiko
ルーテル学院大学

** Hashimoto, Kazuyuki
了徳寺大学メンタルサポートセンター

*** Komuro, Yasuhiro
了徳寺大学保健管理センター

低下させマイナスの自己認知につながってしまう可能性が示唆される。

カウンセリングには自己理解に伴う主体性と自律性の回復や、成長を促進する目的が含まれるだけでなく、人生を自分の責任において幸福なものにしていくとする動機づけが含まれているだろう。学生相談室のような専門的援助を求めることが自己評価にとってマイナスであるという考えは、悩む自己への無力化が背景にあるかもしれず、カウンセリングが持っている主体的な自己実現のプロセスを損なうことにもなりかねない。学生相談室ではオープンルームや研修会など様々なアウトリーチ活動を行っているが、より効果的な活動の方向性を探るためにも、現代の大学生が自分の悩みをどのように捉え、それに対処しようとしているか、そして学生相談室はそのプロセスの中でどのように位置づいているのか理解していくことが重要になってくるだろう。

問題や悩みを抱えた時に他者に助けを求める態度は、社会心理学を中心として研究が進められており、help seeking attitude (援助要請態度) とされる。本研究ではこの態度に注目した。特に臨床心理士のような心理の専門家 (以下、心理士と述べる) に対する態度に関しては、援助を求めることが個人的な弱さ (personal weakness) の印、もしくは失敗の指標 (indicative of failure) として認識されるために最終的な行動になるものから、比較的些細な問題についても相当な人生の変化を期待して積極的に援助を求めるものまで幅広いと指摘されている (Fisher & Turner, 1970)。Komiyama, Good, & Sherrod (2000) は、心理士に相談することが弱さの印になるのではないかといった偏見 (stigma) について調べ、こうした偏見が援助要請態度を低下させることを明らかにしている。日本でも看護師を対象とした研究では、偏見を持たれたりや特別視されるという意識を持つものほど、心理士のコンサルテーションの要請を抑制する可能性が示されている (大島・久田, 2009)。

高野・宇留田 (2002) は、大学で学生相談の援

助を受けるまでのプロセスを「利益」と「コスト」のモデルから検討し、学生相談に援助を求める際のコストには費用や時間のような経済・物的コストの他に、自尊感情への脅威としてまとめられる様々な心理的コストがあると整理した。しかし、心理的問題における心理士への援助要請態度について大学生を対象に研究したものはまだ少ない。今後、学生相談室の活動を考えていく際に、大学生の来談時の心理的コストがどのように軽減されるのか、またコストを軽減するためにはどのような要因が有効になるのかを明らかにしていくことが求められている。

専門的な援助の中でも、精神医学的援助ではなくカウンセリングなどの心理相談援助を心理士等の専門家に求める援助要請態度を見た尺度には「Attitude toward seeking professional psychological help (ATSPPH; Fischer & Turner, 1970)」がある。そしてこの尺度の短縮版が ATSPPH- Short (Fischer & Farina, 1995) であり、構造の妥当性及び再テスト法による信頼性が高い尺度として広く用いられている (e.g., Ang, Lau, Tan, & Lim, 2007; Constantine, 2002)。この尺度は大学生を対象として作成されており、今後大学生の心理士への援助要請を研究する際に有意義であろう。しかし本尺度は英語版であり、日本でそのまま用いることはできない。ATSPPH-S 尺度の日本語版は、植松・橋本 (和)・橋本 (麻)・小室 (2012) において作成が試みられた。ただし、その際は新しい尺度としての検討は十分にできなかった。よって本研究ではこの日本語版を用いて ATSPPH-S 尺度の因子構造と信頼性・妥当性を検討することとした。この尺度は開発者の Fischer & Farina (1995) によって 1 因子構造とされたが、後の研究では 2 因子構造が指摘されている (Elhai, Schweinle, and Anderson, 2008)。よって日本の大学生における因子構造も検討し、彼らの援助要請態度の特徴を明らかにする。

また尺度の構成概念妥当性を明らかにするために、援助希求態度に関連があると思われる 4 つ

の尺度 (「University Personality Index 尺度」, 「UCLA 孤独感尺度」, 「心理的援助への偏見尺度」, 「学生相談室への関心尺度」) との相関を調べる。「University Personality Index (UPI) 尺度」は 1966 年に全国大学保健管理協会の学生相談カウンセラーおよび医師が中心となって、問題のある大学生の早期発見を目指して作成された精神的健康調査表であり、得点が高いほど不調が大きいことになる。専門家による援助を求める場合、もっとも大きなきっかけとなるのは何らかの心身の不調や悩みを抱える程度が高い場合であろう。したがってこの尺度は ATSPPH-S 尺度とは正の相関があると考えられる。さらに、偏見は心理的な問題を抱えた際に援助を求めにくくすることが多くの研究で指摘されている (e.g., Fisher & Tuner, 1970; Komiya ら, 2000; 大 畠 ら, 2009)。本研究では、様々な援助の中でも特に専門家による心理的援助への偏見を尺度化した「心理的援助への偏見 (Stigma) 尺度」を用いる。この尺度は、ATSPPH-S 尺度とは負の相関が予測される。また、高野ら (2002) によれば、学生相談室に関する知識や関心は相談機関の利用促進要因とされている。よって本研究では大学生の心理的問題に対する援助機関としての学生相談を想定し、学生相談に対する知識の有無や関心の有無、期待などを見ている「学生相談室の認識度尺度 (植松ら, 2012)」を用いる。この尺度のうち「相談室への関心・期待」は ATSPPH-S 尺度とは正の相関が予測される。

II. 方法

調査場所と時期 関東圏の大学 4 校

調査対象 大学 1 年生から 4 年生までの計 699 名であった。男子 331 名、女子 367 名、無記名 1 名、平均年齢 18.6 歳 (range: 18-24; $SD=75$) であった。83.9% が 1 年生である。ATSPPH-S 尺度の先行研究では平均年齢が 18~20 歳と低く、比較的低学年を中心に検討されている (e.g., Elhai et al., 2005; Vogel, Wester, & Boysen,

2005; Komiya ら, 2000)。本研究で構成概念妥当性を検討する際の目安として用いることを考え、同じように 1 年生を中心に調査を実施した。

調査方法 大学での授業後 15 分ほどを用いて調査の説明を行い、その場で配布・回収した。

調査内容

1) **心理の専門家による援助を求める態度** Fischer & Farina (1995) による短縮版の「心理的問題について専門的援助を求める態度尺度 (ATSPPH-S; Attitudes toward seeking professional help for psychological problems)」を日本語に翻訳したものを用いた (植松ら, 2012)。翻訳は臨床心理士 2 名によって分かりやすさや内容を吟味しながら行った。うち 1 名は英語に堪能な者であった。「もし私が心理的に深く悩んだり落ち込んだりしたら、まず専門家に相談に行くと思う」、「もし私が今、重い心の葛藤を抱えたら、心理面接でそれを解消できると信じている」といった 10 項目からなる。うち 5 項目は反転項目である。「あてはまる (4 点)」から「あてはまらない (1 点)」の 4 件法で回答を求めた¹⁾。

2) **精神的健康** 1966 年に全国大学保健管理協会の学生相談カウンセラーおよび医師が中心となって作成された UPI (University Personality Index: 60 項目) の中から、坂口・浅井 (2008) の調査で、特に大学生活で学業継続に困難を生じていた学生に出現率の多かった項目を検討し 14 項目を選択した (Appendix1)。「あてはまる (4 点)」から「あてはまらない (1 点)」までの 4 件法で尋ねた。本研究における内的整合性 (クロンバックの α 係数) は .89 が算出された。

3) **心理的援助への偏見** Komiya, Good, & Sherrod (2000) によって作成された Stigma Scale for Receiving Psychological Help (SSRPH) は、心理の専門家による援助を受けることに対する構えについて測るもので、5 項目からなる尺度である (Appendix2)。植松ら (2012) はこの尺度を日本語に翻訳し、先行研究と同様の一因子の構造と内的整合性を明らかにしている。よって本研究でも 5 項目に対して先行研究と同様に「あてはまる (4 点)」から「あてはまらな

い(1点)」までの4件法で回答を求めた。本研究における内的整合性(クロンバックの α 係数)は.86である。

3) 学生相談室への関心 学生相談室について、知識面(例:相談室の場所を知っている)、相談室への関心(例:相談員がどんな人なのか知りたい)、期待(例:相談室には明るいイメージがある)、及び無関心(例:相談室の子とはほとんど知らない)に関する14項目からなる尺度である(植松ら, 2012)。先行研究では下位構造として第1因子「相談室への関心・期待」と第2因子「相談室への無関心」が見出されたが、第2因子の内的整合性があまり高くないため、本研究では第1因子の9項目のみを、相談機関への関心度の指標として用いることとした(Appendix 3)。「あてはまる(4点)」、「あてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。本研究における内的整合性(クロンバックの α 係数)は.78である。

Ⅲ. 結果・考察

1. ATSPPH-S 尺度の構造

1) 主成分分析による検討 SPSS 16.0を用いて統計分析を行った。この尺度は作成時に1因子性が指摘されている(Fisher & Farina, 1995)。よって本研究でも初めに主成分分析によって1因子性を検討した(Table 1)。結果、第1主成分において、反転項目は全てマイナスの負荷量を示した。さらにFisher & Farina (1995)によると α 係数.84が検出された内的整合性の指標も、本研究では α 係数.38と低く、反転項目でマイナスの負荷量がみられたことが、内的整合性の低さにつながったと思われる。先行研究の中でも1因子性における、 α 係数は.80以上が報告されていた(Vogel et al., 2005; Constanine, 2002; Komiya et al, 2000)。先行研究との違いを踏まえて、本研究では因子分析によってさらに尺度の構造を検討することとした。

Table 1 ATSPPH-S 尺度の主成分分析結果

	成分	共通性
5) もし長い間、悩み動揺していたら、私は心理相談員(心理士)の助けを求めよう	.733	.669
3) もし私が今、重い心の葛藤を抱えたら、心理面接でそれを解消できると信じている	.718	.577
6) 私は将来、心理的な相談を受けたいと思う	.689	.513
7) 悩みを抱えた人は、一人でそれを解決しようとせず、専門家と解決するほうが良いだろう	.675	.473
1) もし私が心理的に深く悩んだり落ち込んだりしたら、まず専門家に相談に行くと思う	.648	.498
* 9) 心理相談は最後の手段として、人は自分の問題に取り組むべきである	-.520	.452
* 8) 心理面接に費やす時間やコストを考えると、私のような人間にその価値があるかどうか疑わしい	-.427	.494
* 4) 専門家の助けに頼らず、自分の葛藤や恐怖心に進んで立ち向かおうとする人は何か立派なものがあると思う	-.401	.435
* 2) 心理相談員(心理士)と何らかの問題について話し合うというのは、心の葛藤を乗り越えるために有効ではないと思う	-.354	.404
	寄与率 (%)	34.9

注) *は反転項目

2) 因子分析による検討

探索的因子分析 ATSPPH-S 尺度の信頼性と妥当性を検討した Elhai et al. (2008) は、探索的因子分析の後に確認的因子分析を行い、1 因子と 2 因子構造の適合度を比較し 2 因子構造のあてはまりの良さを明らかにしている。また最終的に見出した 2 因子を構成する項目は、反転項目とそうでないものがきれいに分かれている。彼らは第 1 因子を「援助探索への積極性 (Openness to Seeking Treatment for Emotional Problems)」, 第 2 因子を「援助探索における価値・ニーズ (Value and Need in Seeking Treatment)」と名付けており、両因子には正の因子間相関 ($r=.58$) が見出されている。

本研究でも初めに探索的因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行ったところ、Elhai et al. (2008) と同じ項目によって構成される 2 因子が抽出された。それぞれの因子の内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を求めたところ、第 1 因子が .79, 第 2 因子は .58 であった。しかし因子間相関は、先行研究とは逆に負の値が検出された ($r=-.47$)。

第 2 因子を構成する反転項目は“心理相談に頼らず、自分で何とかするほうがよい”といった内容が含まれる、これらが反転項目であるということは、すなわち“心理相談に頼る方がよい”と読み替えられる。そのため第 2 因子は、“心理士の援助を求める”という内容の第 1 因子とは、本来ならば正の相関があるはずである (Elhai et al, 2008)。しかし本研究では逆の負の相関が見出され、両因子が相反する関係にあることが明らかになった。

ATSPPH-S 尺度が心理士の援助を求める態度を測るものとして開発されたことを考えると、第 2 因子が第 1 因子と正の相関をするように反転項目を反転させないほうがよいということになるだろう。そうした場合の解釈として、第 2 因子が持

つ“心理相談に頼らず、自分で何とかするほうがよい”という態度と、第 1 因子が持つ“心理相談の援助を求める”という態度が正の相関を持つことになり、一見不可解な関係に受け取れる。

しかしながら両者の関係は、支援を求めるクライアントの主体性を軸に考えると、理解することができるのではないだろうか。つまり、専門家の支援を求めるのは、自分で自分の問題を何とかしようと考えた時の選択肢の一つ、と考えることができるだろう。こう考えると、第 1 因子が示す専門家の援助を求める態度は、第 2 因子が示すクライアントの主体的な自己解決の態度とは矛盾しないと思われる。

以上の考察から、本研究ではこの尺度において反転項目を反転させない 2 因子構造を採用することとした (Table 2)。因子間相関は .47 となる。第 1 因子は専門家に援助を求める態度を示す項目で構成されていることから「専門的援助の求め (Seeking Professional Psychological Help)」とし、第 2 因子は自らの力で問題に対処しようとする態度が含まれることから「自己解決志向 (Self-Direction)」と名付けた。

確認的因子分析 次に確認的因子分析を行い、日本語版 ATSPPH-S 尺度の因子構造を検討した。AMOS 16.0 による分析の結果、 χ^2 値の自由度は 26, 値は 112.76 ($p<.001$), 修正適合度指標 (Adjusted Goodness of Fit Index : AGFI) は .931, 比較適合度指標 (Comparative Fit Index : CFI) は .927, Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) は .072 であり、妥当な適合が確認された。推定値は全て 1% 水準以下で有意であった (Figure 1)。

また一因子性の構造によるモデルの適合度も検討したが、 χ^2 値の自由度は 27, 値は 239.55 ($p<.001$), AGFI は .860, CFI は .821, RMSEA は .111 であり、2 因子のモデルに比較するとあまりよい適合とはいえなかった。

Table 2 ATSPPH-S 尺度の探索的因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	Factor 1	Factor 2	共通性
5) もし長い間、悩み動揺していたら、私は心理相談員 (心理士) の助けを求めよう	.836	-.131	.619
3) もし私が今、重い心の葛藤を抱えたら、心理面接でそれを解消できると信じている	.680	.014	.472
6) 私は将来、心理的な相談を受けたいと思う	.593	.046	.379
1) もし私が心理的に深く悩んだり落ち込んだりしたら、まず専門家に相談に行くと思う	.575	.093	.389
7) 悩みを抱えた人は、一人でそれを解決しようとせず、専門家と解決するほうが良いだろう	.560	.044	.339
8) 心理面接に費やす時間やコストを考えると、私のような人間にその価値があるかどうか疑わしい	-.033	.578	.317
9) 心理相談は最後の手段として、人は自分の問題に取り組むべきである	.107	.500	.312
4) 専門家の助けに頼らず、自分の葛藤や恐怖心に進んで立ち向かおうとする人は何か立派なものがあると思う	.003	.481	.233
2) 心理相談員 (心理士) と何らかの問題について話し合うというのは、心の葛藤を乗り越えるために有効ではないと思う	-.015	.441	.189
累積寄与率 (%)	33.4	50.1	

注) 反転項目は反転させずに用いている

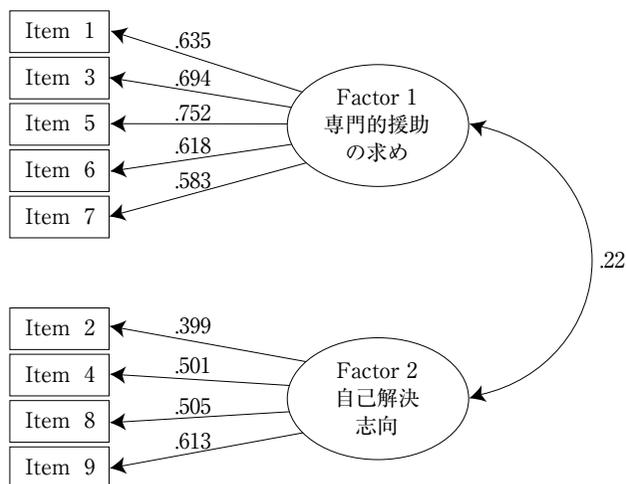


Figure 1 ATSPPH-S 尺度の確認的因子分析結果

注) 反転項目は反転せず用いている。また誤差変数は省略している。

2. 構成概念妥当性の検討

ATSPPH-S 尺度の構成概念妥当性を検証するために、本研究では、先行研究により一定の関連が明らかになっている精神的健康 (UPI 尺度)、心理的援助への偏見 (SSRPH 尺度)、学生相談室への関心 (相談室への関心・期待) との相関を求めた。結果を Table 3 に示した。ATSPPH-S 尺度は因子分析によって第 1 因子「専門的援助の求め (以下、「専門的援助」と述べる)」と第 2 因子「自己解決志向」が抽出されたため、因子ごとに相関を分析した。

UPI 尺度と「専門的援助」、「自己解決志向」は仮説通り、いずれも有意な正の相関がみられた。自分の不調を認識する度合いが高いほど、心理士の援助や自己解決志向が高まることが分かった。SSRPH (偏見) 尺度との相関は「自己解決志向」のみで有意な正の相関がみられ、「専門的援助」は有意な値が得られなかった。これは仮説と一致しない結果である。さらに相談室への関心・期待尺度とは、仮説通り両因子で有意な正の相関が見出された。学生相談室に対する関心や期待の高さが、心理士に専門的援助を求めることや、自己解決志向の高さに関連することが分かった。

ATSPPH-S 尺度の「自己解決志向」は、援助を求めず自分で何とかしようとする側面が含まれるため、分析結果で明らかになったように、心理的援助への偏見の高さが関連するようである。しかし「自己解決志向」は、同時に相談機関への関心の高さとの関連も見られている。このことから、大学生は心理士の専門的援助に対しては偏見と関心という、ある種のアンビバレントさをもっ

ていることが示唆される。

IV. 総合的考察

本研究では、第一に大学生を対象とした心理的問題に対する相談機関としての学生相談室における学内のアウトリーチ活動の方向性を検討するために、心理的問題に対して心理士による援助を求める態度を測定できる日本語版の ATSPPH-S 尺度の因子構造の妥当性、信頼性と構成概念妥当性を検討した。

因子構造としては 2 因子が抽出され、Elhai et al. (2008) と項目数や内容含め一致した構造が確認できた。しかし因子間相関において負の相関が検出された。本来は、心理士の援助を求める態度を測定するための尺度であるため、反転項目を反転させず、両因子が正の相関になるように調整するほうが解釈上妥当であると判断された。さらに確認的因子分析においては、この 2 因子モデルが十分に適合していることが確認された。本研究では第一因子を「専門的援助の求め」とし、第 2 因子を「自己解決志向」と名付けた。内的整合性の指標 (クロンバックの α 係数) からは一定の信頼性が示された。

本研究で明らかになったように「専門的援助の求め」と「自己解決志向」は、一般的には相反する概念と捉えられる。しかし少なくとも、本研究で対象とした日本の大学生にとっては、専門家の援助を求める志向性は自分で自分の問題に対処しようとする志向性と関連し合っているものであるといえる。先行研究と異なる関係が見られた理由として、第一に考えられるのは、アイデンティ

Table 3 ATSPPH-S 尺度と他の尺度の相関分析結果

	UPI 尺度	心理的援助への偏見 (SSRPH)	相談室への関心・期待
ATSPPH-S 「専門的援助の求め」	.159*	.055	.477**
ATSPPH-S 「自己解決志向」	.343**	.394**	.148**

注) * $p < .05$, ** $p < .001$

ティ確立や親からの精神的自立を発達課題としてもつ青年期の大学生にとって、援助希求は自主的な問題解決方法の1つになっていることを反映している可能性である。援助を求める態度のうちもっとも成熟した形は、自主的で且つ意識的な援助要請であろう。さらに考えられる理由は、先行研究がほとんどアメリカで実施されたものであるため、心理士による相談援助がどのように大学生に認識されているかという文化の違いが反映されている可能性である。本研究では第2因子の「自己解決志向」が、心理的援助への偏見と正の相関があった。この結果は、日本の大学生が欧米ほど心理相談を有意義なものとして認識していないことや、マイナスのレッテルを貼られる恐れを持っている可能性を示唆する。日本の大学生が心理相談や学生相談をどのように捉えているかといった事項については、今後さらに検討していく必要があるだろう。また、学生相談のアウトリーチ活動においては、心理相談に対する偏見を減らすような心理教育的な試みが必要になると思われる。

また、信頼性の指標である α 係数を算出したところ、第2因子は.65であった。ある程度の信頼性は保証されるだろうが、確認的因子分析の推定値を見ると第2因子の項目は第1因子に比べて低い値を示している。こうした推定値の低さは第2因子の不安定さに影響するだろう。よって本尺度の信頼性については再テスト法などを用いて、今後も検討していく必要があるといえる。

さらに、日本語版 ATSPPH-S 尺度の構成概念妥当性を検討するために、4つの尺度との相関を求めた。精神的健康度をみるUPI尺度とは、両因子とも正の相関があり、この結果は当初の予測と一致する結果であった。不調の度合いが高い者ほど問題解決のために専門的援助を求める、もしくは自分で問題を解決しようとすると思われる。心理的援助への偏見(SSRPH)尺度とは「自己解決志向」のみ有意な正の相関がみられた。すなわち、自分で自分の問題に対処しようとする姿勢は、心理相談を利用すると良い印象をもたれないといった認識や、専門家を頼ることは弱さの証

になってしまうという認識を少なからず反映するものと考えられる。本研究で使用したSSRPH尺度はアメリカの大学生を対象とした研究では、ATSPPH-S尺度と有意な負の相関が見出されている(Komiya et al., 2000; Vogel et al., 2005)。こうした先行研究の結果は、本研究では「自己解決志向」において一致しなかった。一方、両因子は学生相談室への関心・期待尺度とはともに有意な正の相関がみられた。相関係数は「専門家の支援の求め」($r=.477, p<.001$)のほうが「自己解決志向」($r=.148, p<.001$)よりも高い値を示しているが、いずれも当初の予測と一致する結果である。これらの結果から、「自己解決志向」は、心理士への偏見と同時に、関心や期待も内包しているようである。日本の大学生は、心理相談に関心を持つが、同時に偏見ももっているという両価的な態度があるならば、来談を何が後押しするのか、またこうした偏見がどのように軽減できるのか、今後の研究で明らかにしていくことが求められるよう。

以上の検討から、本研究の日本語版 ATSPPH-S 尺度は、英語版尺度の測る“心理的な問題に対して専門家による心理的援助を求める態度”(Fisher & Farina, 1995)をみるものとして、ある程度妥当な内容であることが示唆される。しかし差異が見られた点については、今後さらに他の要因との検討を行うことで、本尺度の特徴をさらに明らかにしていく必要がある。

最後に本研究の限界を述べる。やはり本研究で明らかになった因子構造の違いには、英語版を日本語に翻訳したことの影響が、少なからず含まれている可能性がある。翻訳においては、英語に堪能な者を含む2名の臨床心理士(調査実施当時は、同じ大学の学生相談員であった)が、英語版の尺度の意図する内容を変えないように配慮しながら行った(植松ら, 2012)。しかし、日本の大学生が分かりやすいようにと、“psychotherapy”や“psychological counseling”を“心理相談(心理的な相談)”, “emotional conflict”を“心の葛藤”と訳すなど、単語レベルからある程度の意識

が行われている。こうした翻訳過程において、英語版の尺度が目指した内容を反映しきれなかった可能性もある。構成概念妥当性の分析によって、ある程度予測された結果が明らかになったものの、日本人青年の学生相談および心理相談への意識の特殊性や、日本語版尺度の信頼性・妥当性の検討を続けていく必要があるだろう。

謝 辞

今回の調査に回答いただきました学生の皆様に感謝致します。調査に協力して下さった先生方、データ入力をお手伝い頂いた皆様にも助けられました。また本研究は、了徳寺大学学医学教育センターの課題研究として行いました。ここに記して感謝致します。

注

- 1) 本論文の原稿を完成後に、項目10“Personal and emotional troubles, like many things, tend to work out by themselves”についてミスがあったことが分かったため、本研究ではこの項目を削除して再分析を行った。主成分分析、因子分析、信頼性係数及び、妥当性検討のための相関の分析について項目を削除する前と後とで大きな違いは見られていない。よって因子の解釈や考察に問題はないと判断し、負荷量や α 係数、相関係数の数値以外は変更はしていない。

引用文献

- Ang, R.P., Lau, S., Tan Ai-Girl., and Lim, K. M. (2007) Refining the Attitudes Toward Seeking Professional Help Scale: Factorial Invariance Across Two Asian Samples, *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 40, 130-141.
- Constantine, M.G. (2002) Predictors of Satisfaction With Counseling: Racial and Ethnic Minority Clients' Attitudes Toward Counseling and Ratings

- of Their Counselors' General and Multicultural Counseling Competence, *Journal of Counseling Psychology*, 49 (2), 255-263.
- Elhai, J. D., Schweinle, W., and Anderson, S. M. (2008) Reliability and validity of the Attitudes Toward Seeking Professional Psychological Help Scale-Short Form, *Psychiatry Research*, 159, 320-229.
- Fischer, E. & Farina, A. (1995) Attitude toward seeking professional psychological help: A shortened form and considerations for research. *Journal of college student development*, 36, 368-373.
- Fischer, E. & Tuner, J.L. (1970) Orientations to seeking professional help: Development and research utility of an attitude scale. *Journal of consulting and clinical psychology*, 35, 79-90.
- Komiya, N. Good, G.E., & Sherrod, N.B. (2000) Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking psychological help. *Journal of counseling psychology*, 47, 138-143.
- 大島みどり・久田満 (2009)「看護師における心理専門職への援助要請に対する態度：態度尺度の作成と関連要因の検討」『上智大学心理学年報』, 33, 79-87.
- 坂口守男・浅井均 (2008)「生活の場で見えるメンタルヘルス(3)：適応困難学生からの検討」『大阪教育大学紀要 第三部門』, 56, 41-50.
- 高野明・宇留田麗 (2002)「援助要請行動から見たサービスとしての学生相談」『教育心理学研究』, 50, 113-125.
- 田村修一・石隈利紀 (2001)「指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究：バーンアウトとの関連に焦点を当てて」『教育心理学研究』, 49, 438-448.
- 植松晃子・橋本和幸・橋本麻耶・小室安宏 (2012)「大学生を対象としたメンタルヘルス調査報告：学生相談室活動の展開を探る」『了徳寺大学研究紀要』, 7, 71-81.
- Vogel, D.L., Wester, S.R., Wei, M., & Boysen, G.A. (2005) The role of outcome expectations and attitudes on decisions of seek professional help. *Journal of counseling psychology*, 52, 459-470.

Appendix 1 本研究で用いたUPI尺度 (14項目)

質問項目
人に会いたくない
死にたくなることがある
人づきあいが嫌いである
他人に陰口を言われると感じる
胸が痛んだり、しめつけられる
他人に相手にされない
他人が信じられない
自分の変なおいが気になる
気持ちが悲観的になる
頭痛がする
つまらない考えがとれない (やめられない)
体がだるい
不眠がちである (眠れないことが多い)
めまいや立ちくらみがする

Appendix 2 Stigma Scale for Receiving Psychological Help (SSRPH) 尺度 (5項目)

質問項目
人々は誰かが心理相談員に会っていることを知ったら、その人にいい印象をもたないだろう
気持ちや対人関係での悩みを心理相談員に話すことは、偏見を持たれる
人々は専門的な心理相談を受けている人を好ましく思わない傾向がある
気持ちや対人関係での悩みを心理相談員に話すことは、人としての弱さや不出来なことの証拠だ
もし心理相談員に会っているなら、それを隠しておくほうが賢明だ

Appendix 3 学生相談室への関心・期待尺度 (9項目)

質問項目
大学に心理相談室があると思うと安心できる
相談室のニュースレターを読みたい
相談室の場所を知っている
相談員がどんな人なのか知りたい
相談室には明るいイメージがある
相談室のメールアドレスや電話番号を知っている
どんなことでも相談してよいとわかっている
相談料は無料であると知っている
相談室の室内やその近くに行ったことがある

Reliability and Validity of a Scale for Assessing the Attitudes of Japanese Students Seeking Professional Psychological Help

Uematsu, Akiko / Hashimoto, Kazuyuki / Komuro, Yasuhiro

We examined the reliability and validity of a Japanese version of the Seeking Professional Psychological Help Scale-Short (ATSPPH-S) scale, a widely cited scale used to explore adolescents' attitudes towards mental health services. Participants were 699 Japanese university students. Factor analysis showed that the two factors of the Japanese version were negatively correlated, indicating a different relationship between these factors than was found in the original version. This result may suggest that Japanese adolescents would seek professional psychological help as part of a self-directed problem-solving process—in other words, an extension of self-help. Adequate model fit was indicated after we converted five items that were originally reverse scored to straight items. This model also had two factors (“seeking professional psychological help” and “self-direction”). Both factors were significantly correlated to a mental health scale and an index of concern about the mental health service center at their university. The second factor was also correlated positively with the Stigma Scale for Receiving Psychological Help. It indicated that Japanese adolescents might have some ambivalence regarding the use of mental health services. Thus, the ATSPPH-S showed adequate internal reliability and validity for Japanese adolescents, and differed slightly for this group.

Keywords: Mental health service, Help seeking behavior, Attitudes Toward Seeking Professional Psychological Help Short-Scale, Social stigma to receiving psychological help.